

# 受念寺だより

真宗大谷派 岸上山 受念寺

大阪市住吉区万代 5-17-25

電話 06-6674-1135

ホームページ [junenji.publog.jp](http://junenji.publog.jp)



自己が分からない人は他人を責める

自己が分かった人は他人を痛む

安田理深

テレビや新聞では、芸能人や政治家など著名な人を取り上げては、「こんな悪いことをした」といって批判する報道がよくなされます。見ている私たちも「あいつは悪いやつだ」と過ちを批判します。同じことを職場や身の回りでもします。「あの人はこんなことをして許せない」と過ちを批判します。「批判して正すことがいいことだ」という思いが根強くあるのです。そしてまさにその批判しているとき、「私はそんなことはしない」と「善人」になっています。しかし果たして私はそんなに「善人」でしょうか？

いざ自分が批判される側になったら、「それはしかたなかった」と必然的だと思われる理由を並べ、自己弁護の言い訳ばかりすることになります。しないでおこうと思っただけでも、条件次第であらゆることをしてしまうという自分の愚かさ、自分の弱さを知り、自分の正しさの不確かさを知る人は、自分の正しさを振りかざさない。共に愚かなことをしてしまいう人間であると痛む。なぜそうなったのかと思いをいたし、自分のこととして共に悩む。そういうことではないでしょうか。

不確かな正しさを振りかざしたとき、それは刃物を振りかざしているのと同じことです。「悪人」のレッテルを貼って切り捨てても、自分は「善人」の優越感に浸っただけで、自分自身の愚かさには気づきません。そしてお互いに切り捨て合うような「共に」が成り立たない殺伐とした世の中になるのではないのでしょうか。

自分の正義が人を傷つけていることに気がつかない。自分がこれほどまでに「そうじゃない」と弁解しなかった口を他人に対してはふさいでしまう。そして自分の悪いところは見えていない。そういう一番やっかいなのが自分です。

## あなたにはわからない

寝たきりの患者さんを診察するとき、そう言われているように思うときがある。声なき声が、そう言っておられるように思うときがあるのである。そんなとき、恥ずかしながら病床へ向かおうとしても足が竦むのである。思えばこの言葉は、十数年前、私がまだ研修医だった頃、ALSと診断されたある方に実際に投げかけられた言葉でもあった…。

ALS (Amyotrophic Lateral Sclerosis, 筋萎縮性側索硬化症)とは、運動ニューロンが変性することにより、筋萎縮、筋力低下を来す疾患である。全身の骨格筋に及ぶため、四肢が動かなくなる、会話や嚥下ができなくなる、さらには呼吸ができなくなるという症状が出現する。進行が速いため人工呼吸器などを使用しなければ数年で亡くなることが多い。現在の医学をもってしても根治療法はない。一方、感覚障害や高次脳機能の障害は見られにくく、わずかに動く筋肉を使って機械を操作し、コミュニケーションが取れることもある。それだけに、難病に向き合う中でその苦悩を語られることも少なくない。

医学的にはALSについてよく学んだ。診断の高度な技術も身に付けたつもりであった。大病院に勤務していたから、ALSの患者さんを比較的多く診察してきた。したがって、ALSについて他の人よりも多くを知っており、多少の自信を持ち始めた時期であった。そのときに言われたのがこの言葉である。

「あなたにはわからない」

打ちのめされた思いであった。ああ、所詮外から眺めていただけであった。何も知っていなかった。「人間」を見ずに、ALSの「症状」「徴候」とい

った「疾患」を眺めていたに過ぎなかった。ALSを抱えて生きるということの何たるかを見ようともしていなかった。全く他人事であり自分のことになっていなかった。

このところ「ALSアイス・バケツ・チャレンジ」と称する、著名人が氷水をかぶることで注目されている運動があるらしい。これにより寄付金が増加し、ALSの認知度が向上しているという。しかしほんとうの意味で病を知ろうとしている人はどのくらいおられるだろうか。自分のこととして見ている方はどれくらいおられるだろうか。大半の人は外から眺めているだけではないか。

それでは病気を「自分のこととして見る」とはどのようなことだろうか。自分がALSにならないとわからないことなのか。医者はあらゆる病気をみる。あらゆる病気にかからなければ、自分のこととして考えられないのか。自らが病気になるということは、気づかなかった大切なことに気がつく縁となる。しかし、ALSになればALSの患者さんのことがわかる、と思っているとすれば、それはまた人間をみていないのではないか。「私がALSを抱えて生きること」と、「あなたがALSを抱えて生きること」はやはり違う。

ある立場に立つ限り、どこまでもあい対することになる。こちら側とあちら側。「医者として」「患者として」「子を持つ母として」「要介護の親を持つ子として」「独身の身として」「学生として」「会社の上司として」「著名人として」「私として」「あなたとして」…。「子を持たない女性」は「子を持つ母」の気持ちが変わらないと言うが、「子を持つ母」は「子を持たない女性」の気持ちはわからない。「私」を主張する限り、「あなた」の主張とあい対する。「病気を持たない身として」「病気を持つ人に」手をさしのべる、「著名人として」氷水をかぶる、ということころには「上から下へ」の構図が見える。「共に」ということがどこまでも成り立たない。しかしだからといって「どのような立場にも立たない」という

ことはできない。人は必ずある立場に立つしかない。立場の違いはどこまでもつきまとう。しかし、どのような立場を取ったとしても、その根底に流れるものに気づくことはできるはずである。

「見老病死 悟世非常 棄国財位 入山学道」  
「老病死」を見て、世の非常を悟る。国と財と位を棄てて山に入りて道を学したもう。  
（『大無量寿経』）

積尊（お釈迦さま）の出家の場面である。「老病死」を見て、世の非常を悟るというが、「ああ、はかないな」というのであれば、それはただ眺めているだけである。積尊は王宮で暮らしていたときも老病死を知っていたはずであるが、ただ眺めていたのである。しかしある日、「世の非常」を悟ったという。「非常」とは、老いによって、病によって、死によって、今まで生きる喜びを支えていたものが崩れることである。そしてこの世のどんなものも喜ばなくなる、もはや何をしてもそれに意味を見いだせなくなる、人として生まれたことを喜ばなくなるということである。「若い」とは若いときよりマイナス、「病」は健康よりマイナス、「死」は絶望でしかない。草木や動物たちはそのように人生に絶望しないかもしれない。しかし我々人間は、「人間であるがゆえに」人生に起こる目の前の「老病死」を評価し、そして絶望し、誰しも「老病死」を抱えたものとして生を与えられているにもかかわらず、その与えられた掛け替えない生をそのままにただけなくなり、そのままに喜ばなくなるのである。非常を悟ったというのは、そのことが自分のこととなったということであろう。そして積尊は、「老病死」によっても奪われない人生のほんとうの意味を求めて歩み始めたのであった。

どのような立場を取ったとしても、「人間であるがゆえ」に抱える苦しみは誰もが平等に持っている



はずである。そしてその「苦しむ私」がまた再び喜びに出遇うことができるということも、「人間であるがゆえに」あり得る。しかし我々はそのことを忘れて、ある立場にしがみつき、ただ一人の丸裸の人間に立ち返ることができない。何かの立場からではない、その根底にある「人間であるがゆえに」悲しむこと、喜ぶことがある、ということ忘れて生きているのである。

十九歳で不治の病（おそらく結核）で亡くなった一瀬勝裕という人物の臨床記、『無碍道』。病院にて医師、看護師、母と共に皆で病床法話を聞き、お念仏をしながらいよいよ臨終という場面である。そこには次のようにある。

「：声高くお念仏していたが何を思ってたか、『皆死ぬ』」

と申しました。それに応じて私が、『皆其れを忘れてうかうかと暮して居るよ』と言うと、即座に

「俺も忘れていた！」

実際にはつきりしていません。

勝裕さんの胸中は如何でしょう。若し大悲を聞き開くことなかりせば、どうして今是れが落付いて言えましようか。：：」

（『無碍道』 山本晋道 昭和十六年）

このとき立ち会ったのが高原憲という医師である。彼は信仰深く日頃から聞法を続けられ、勝裕さんに仏書を提供され、病床での法話を導かれたのも彼であった。その息子さんである高原誠医師は、雑誌『慈光』の中で次のように述べておられる。

「：患者と医者はい対するものであろうか。私は患者と医者と同じ方向に歩む姿にこそ、療養道が展開するものと思う。病気を治すのではない、病氣という機会を通じて、患者と医者が生命の尊厳を感じ、生命の神秘にとまどい、試

行錯誤しながら、如何に生くべきかという命題を考えなければいけない。そこに医学の本質に触れた道が存在すると私は思う。私はこの歩みを医学新道と考えている。

さてここに患者と医者対立ではなく同坐すると言うことは非常に大切なことであるが実践上至難なことである。又、限界のある科学の世界に居て、それを超えた世界を求めると願うに等しい。この不可能事を可能化させる唯一の扉が『聞法』にある。亡き父高原憲が患者にも勧め、自らも聞法をもって生涯を貫ぬいて療養真道を実践してくれたことは、私にとっても大きな燈炬となっている。：：『慈光』（第二十四卷第四号 昭和四十七年）

病はそれ自体苦しみであるが、もし病はマイナス、病はかわいそうという見方、価値観しかない世を生きていかなければならぬとすれば、それは一層の苦しみではないか。それぞれ人によって立場は違えども、病を抱えた人生もそのままに、与えられたただ一つの人生として、いのちの痛みといのちの尊厳を共に感じてゆける世において、はじめて「共に」が成り立つのではないだろうか。

だからこそ私は足が竦むのである。自分の価値観、自分の立場に留まっている私が、価値観を超えた、立場をこえたいのちの尊厳に触れられるのだろうか。「あなたにはわからない」という言葉が足を竦ませる。しかしまた同じその言葉が足を進ませる。その言葉によって初めて照らし出される自分がある。

（ブログ「お医者さんはお坊さん」junenji.blog.jp 二〇一四年八月二十四日の記事を改編）

## ご門徒さんちの窓辺から

今年の母の日にカーネーションの鉢植えが送られてきたそうです。お子さんはおられないのですが、小さい頃にお母さんのようにお世話になったという慕っている方が、送ってこられたのです。お参りではその方の子供の頃のお話を聞かせていただきました。

そのカーネーションですが、一度は全部枯れてしまつて、半分はあきらめていたそうです。けれどもこのあいだ、仏様にお供えした水をやったから、しばらくしてつぼみが出てきて咲き始めた、といつて見せていただきました。それがこの写真のカーネーションです。

仏様の水で枯れた鉢に花が咲いた、不思議なこともあるものだ、とおっしゃっていました。しかし不思議といつても神秘的な水の力ではなく、親子ではない二人が出遇い、親子同様に互いに願い願われ今までつながり、そして今鉢に花を咲かせた。そのような願いの力は、われわれの思いはからいを越えているということではないでしょうか。

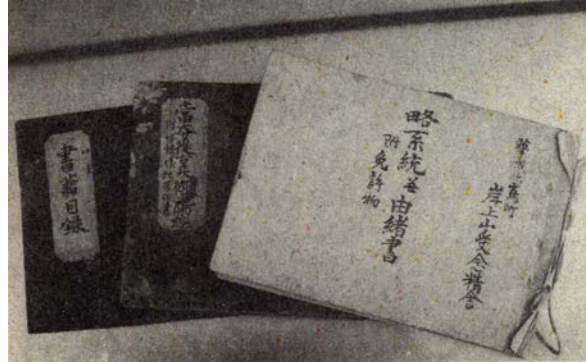


受念寺の歴史(第一回)

## 創建・吹田時代〔戦国〜安土桃山時代〕

一五〇六年(永正三年)〜一五九三年(文禄二年)

当寺は一五〇六年(永正三年)浄土真宗の道場として創建されました。そして本年まで五〇八年の長きにわたり、間法の道場としてお念仏の教えを聞きつづけ、そして一人一人のお念仏の生活を通して、その教えが今日まで伝えられてきました。現在の住職、正雲は第二十一世です。今回から数回にわたり、その歴史を少しずつ紐解きたいと思えます。



## 世は戦国の時代

時代は室町時代中期。一四六七年(応仁元年)の応仁の乱、一四九三年(明応二年)の明応の政変に始まる戦国時代です。足利義澄(一四八一〜一五一一)執政、後柏原天皇(一四六四〜一五二六)の時代にあたります。当寺が開かれた水田(吹田)庄(現在の大阪府吹田市)も大変混乱した時代だったようです。

## 真宗と大坂

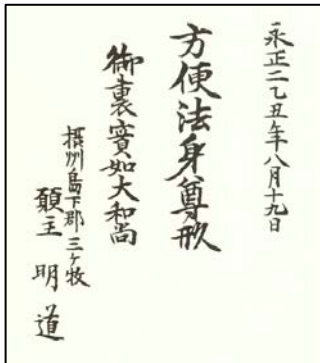
真宗と大坂の関係としては、第八世蓮如上人は最晩年の一四九六年(明応五年)、ごく簡素ではありましたが大坂(現在の大阪城の本丸辺りといわれている)に坊舎を建立しており、亡くなる直前の一四九九年(明

応八年)までこの地に住まわれました。蓮如上人の『御文』四帖目十五通には「当国摂州東成郡生玉の庄内大坂といふ在所は、往古よりいかなる約束のありけるにや、さんぬる明応第五の秋下旬のころより、かりそめながらこの在所をみそめしより、すでにかたのごとく一字の坊舎を建立せしめ」とあり、これが「大坂」という地名の最古の記録と言われています。この間わずか三年ほどでしたが門前町が形成され、真宗門徒が広まり、「大坂」という地名がこの地に定着したと言われています。

そのような時代、真宗寺院は他の宗派のように七堂伽藍を具えた立派なものではなく、庶民的な「道場」という形で、普通の民家に若干の改造を施した程度の簡素な造りのものだったようです。そしてそれに対して、本山である本願寺が方便法身の尊形(阿弥陀仏の絵像)を下附することで寺として公認したといわれています。このようにして真宗寺院が吹田の各集落にも次々と作られていったようです。

## 受念寺創建

創建者は圓齊(一五二六)といい、蓮如上人(一四一五〜一四九九)の子である實如上人(一四五八〜一五二五、本願寺第九世)より教化を被り、一五〇五年(永正二年)八月一九日方便法身の尊形を賜りました。これによって、一五〇六年(永正三年)摂州太田郡水田庄濱道村(現在の大阪府吹田市)に一棟の坊舎が建立されたとされており、それが当寺の始まりであると伝えられています。



〔第二回 池田町時代〔安土桃山〜江戸時代初期〕石山合戦の時代です。〕

## 編集後記

8月に初めての試みとして第一号を発刊いたしました。一号で終わってしまったかと思いましたが、報恩講にあわせてなんとか第二号が出せました。できるだけ続けられるよう、ほどよいペースで出させていただきます。「ご門徒さんちの窓辺から」のコーナーでは、引き続き交流の場として皆様からの声を取り上げていきたいと思えます。

なお、バックナンバーは受念寺ホームページ [junenji-publog.jp](http://junenji-publog.jp) よりご覧いただけます。

それでは、今後ともよろしくお願いいたします。

(文責・副住職 正仁)

副住職ブログ: [junenji.blog.jp](http://junenji.blog.jp)



## 軽費老人ホーム 受念館

### 入居者募集中!

- ★「住みよい居室」「おいしい食事」を「軽費で」ご提供。
- ★心のふれあいを大切にする、昔ながらのアットホームであたたかな安心の生活環境。
- ★60歳以上で食事が自分で取れる方なら、どちらにお住まいでも結構です。

施設見学は午前10時から午後5時まで。いつでも受け付けております。

◇お問い合わせは・・・  
06-6674-1181 までお気軽にどうぞ。  
ブログ: <http://52664141.at.webry.info/>